平成８年３月

津軽藩士殉難事件の調査から今日まで

日置順正

〒099-41　北海道斜里郡斜里町朱円

一. 慰霊碑建立の発案と初回の弘前行

昭和30年発刊の斜里町史上巻に、津軽藩の斜里警備の概要が載せられて、それまでその由来が不明のまま町内に遺されていた①禅龍寺に保存されている［シャリ場所死亡人控］の過去帳や、②日照寺境内に安置されている文化９年７月20日、前田久太郎、尾本多吉等の寄進した桜御影石の立派な供養碑、③並びに是と全く同じ同型であるが只題字の名号が、日照寺境内のは南無妙法蓮華経であるのに、この供養碑は書体の全く珍しい南無阿弥陀佛と刻まれ、元皆月寺（明治27年建立）境内（前西念寺の在った場所）の、高台砂山の崖際に半分程を、60年余の長い間吹き上げてくる砂に埋まっていた、供養碑（写真１）の三点との関わりが濃くなった自信で、これに関心を持つ人々（郷土史研究グループ）の胸中には、いずれ世が落ち着いたら、この解明に取り組もうとの思いが強まった。その中心人物は朱円在住の当時斜里町郷土研究会副会長の熱血漢、故栗沢喜重郎君であった。昭和45年しれとこ資料館が開設せられ、当然その運営委員会も郷研グループが中心であり、会合する機会も多くなって、前記殉難事件取り組みの機運も、段々熟していった。私は昭和45年の秋、所用で北見市へ行く道を網走の大曲から二見ヶ岡を通って端野町へ出る道を選んだ。高台へ上って宇原内への分岐点で、左角で見慣れぬ一基の碑が目についた。車を停めて読んでゆくうちに、私の胸に一句々食い入るような衝撃を与えた。明治24年軍用の目的で、旭川から網走まで、月形と釧路の囚人を使い、僅か６ヶ月の短期間で開削したいわゆる北海道中央道路（一名囚人道路）犠牲者の慰霊碑（写真２）であった。今日と違い、幼稚な道具で大密林を伐り開き、山を削り、谷を埋めての難工事の連続で、夥しい数の死亡者が続出、沿線の各地に足に鎖を附けたままの埋葬墓が存在することが判り、昭和43年開道百年を記念して沿道関係市町村が相謀り、建立せられた供養碑であった。私はその碑文を繰り返し読んで、自分に言い聞かせるものを知った。書いたものを読む人には限りがある、しかし、このように碑にして置けば、近遠、年代に関係なく、これを読んだ人々に永久にその史実を遺すことが出来る確信を得た。現にこの私が詳しくその悲史を知ったのだ。「よし、何が何でも殉難事件の史実を調べ上げて、慰霊碑を建て、後世に遺す責任がある」と決意した。越えて昭和46年の春の暖かいある日、盟友栗沢君と、高台崖際の半分程砂に埋もれている供養碑横の乾いた土の所に、枯れ草を集めて敷いて腰を据え、数刻慰霊碑建立の段取話に胸を弾ませながら語り合い、彼は建立作業を、私は資金調達の役割分担まで、青年にかえったような情熱で夢を弾ませた。しかし残念ながら彼は、２年後の建立の盛典を見ずして病魔に斃れ、志半にして惜しまれつつ逝った。このようにして民間の機運も昂まり、私は昭和46年秋９月の定例議会の一般質問で、津軽藩士殉難の史実の解明と慰霊碑建立の重要性を訴え、時の町長藤谷氏の所見を求めた。これが建立運動の第一歩である。藤谷町長は博識で、強い信念の持ち主で、特にこのような歴史的な文化問題には燃えるような情熱と関心を持たれ、当然この問題にも知識と責任を感じて居られた。町長は次のように答弁された。「決して等閑に附している訳ではないが、この問題の調査解明は闇夜に手探りで物を探すようなもの、長い年月と専門の歴史的知識が不可欠で、行政では到底困難なことである。しかし私もあなた同様の尊い夢を持っているので、町として可能な限りの協力応援は惜しまない。是非取組んで頂きたい」と力強い答弁を得た。同志は町長のこの決意を聞いて、大問題ながら一致協力してやるべく固く契り合った。心は逸っても当時の状況としては町史上巻の津軽藩の斜里警備項と禅龍寺保存の過去帳と文化９年建立の供養碑以

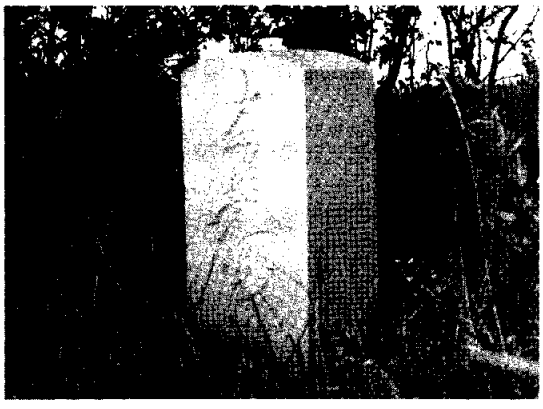


写真1　砂に埋れた南無阿弥陀仏の供養碑

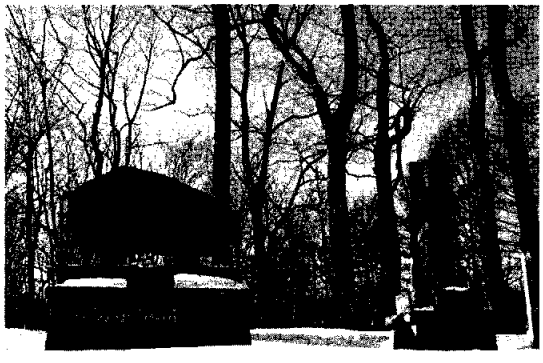


写真2　囚人の犠牲者の供養碑

外に触れられるものは何一つ無い。後に判った松前詰合日記も、過去帳の出所も以後180年余の無人に等しい場所での辿り方も皆目判らない。実際何から手を着けるかに迷った。そこで私はまず、津軽藩の所在地弘前は300年の歴史の街、古文書は山程貯蔵されてあるだろうし、また歴史専門の研究のグループも有らう、おそらく斜里での死没事件など一目瞭然と調べ上げてあるだろうから、私が斜里にある［証］を持って、５～６日合同で調査すれば、大体の解明は出来るだろうと考え、早い機会の弘前行を決めた。それには調査の効率を上げるため、訪郷日以前に弘前側の資料の整備を手紙で藤森市長宛に要請した。例えばシャリでの72名の死没者名、郷夫の場合の現在の出身地名、その他出陣記録など５項目をお願いして昭和47年２月11日訪弘予定日を１ヶ月遡って送った。そしてそのことを藤谷町長に話したら、大変喜んでこちらから持っていく資料の整備に協力して下さった。まず町史に載っている津軽藩の斜里警備の項のコピー10部と、禅龍寺保存の過去帳のコピー10部を用意して下さった。私は日照寺境内と、崖際に半分ほど砂に埋まっている文化９年建立の供養碑の写真各10枚を用意し、まずこれだけ現地から貴重な証を持って行けば、目的達成は必定とやや安緒した。　私は約束の日に胸を弾ませて弘前を訪問した。が案に相違して、向側の空気は一向に静だ。曰く図書館係長が半月を費やして、文化年間初期代の古文書を精査したが、エゾ地シャリ事件に関して、纏まった記録は何もなく、事件の真相は全く不明との言。私は驚くのみでなく目の前が暗くなる程の落膽をした。そのような訳で逆に私が持参した４点の現地での生きた証の資料に吃驚し、さあ大変、新聞社、テレビ、広報、陸奥史談会等続々集まって、本家の弘前に無いのに派兵出先の斜里町にこれだけ貴重な資料があることに、寧ろ不思議に思うくらい大騒ぎとなり、町の方針や私の意志を確かめず新聞は斜里町で慰霊碑建立の計画、とデカデカと報道する有様、残念ながら初期の目的は見事に外れたが、陸奥史談会長成田末五郎先生が中心になられ、その後緊密な連絡をとりながら共同調査を進め、私の手許には先生から頂いた調査の手紙が最後までには一束にもなった。そこでなぜ弘前に、斜里事件の纏まった記録が無いのか。津軽藩がエゾ地警備のための最初の派兵が1793年であった。以後25年間に延べ8,700人出兵し、287人死亡している。東北の地上に人間以外に生きる者、山野に食べられて毒にならない青い物が全く無くなったと伝えられる、あの酷い地獄のような天明の大飢饉には、津軽藩領内で住民の三分の一の82,000人が餓死したといわれるが、その10年後からエゾ地への派兵が始まったので、郷夫の徴募には苦労があったらしい。従ってシャリでの越冬に72名もの死亡者を出したことが広まる噂を慮れ、藩では一切秘事扱いにし、記録にも遺さなかったものだろうと史家は言われた。後で判ったことであるが、生き残って帰った青年武士斉藤勝利が、帰還後藩史に役立たすべき望みで苦労して書き続けた日記を何の沙汰もなかったのを嘆き、露見したら死を覚悟して書き遺した秘録「松前詰合日記」が、その辺の事情を物語ると言えよう。

【此壱冊は他見無用永く子孫江と傳
松前詰合日記全　斉藤勝利】

二. 慰霊碑の拝み石の探索

昭和47年5月11日、いよいよ建立委員会が結成され、史実の調査、拝み石の探索など一挙に山程の手探り仕事が待っていた。石探しも、金さんと二人でやった。どのような石に当たるやらも判らん前からまず耳に聞こえてくる名の有る碑の見学に機会あるごとに歩いた。尾岱沼の会津藩士の慰霊碑や北見市内の各碑など、未知の地であっても国道を車で通る私の目には、碑、碑とそれに触れることに輝いていた。しかし私等の頭の中に描いていたより、いずれも小型でまあ失望したようなものだった。金さんも、私も、車が無いけど、幸にして碑の建立を依頼していた、美幌町の石材店社長野口実氏がこの意義ある碑の建立に携われることに、大変な情熱を傾注され、率先して拝み石探しに奔走して下さった。拝み石は町内産の大自然石をとの、建立委員会の方針に沿い、日の出以東の海岸、岩尾別の開拓地跡、川や山中、など毎日毎日探した。まず日の出海岸で格好のものを見付け、委員会の下見をしてもらったが、石の適否より、当時のような片崩しの道路の上に、大きな重機を据え置いて、ワイヤーで強力に吊し寄せることは、道路の危険この上もなく、さらに国道は一本道で迂回路を作らずにそのような作業は駄目と失敗。町内の河川で山麓に遠い流域を持つ川、即ち斜里川、幾品川、奥藥別川には岩石は無く、ヌカマップ川以東の川原には大石がある。しかし搬出可能な場所にあることが必須条件で、道も無い所にどんな適材が在ってもそれこそ絵に書いた餅の類だ。今度はヌカマップ川を林道を通って国有林へ入って行った。まず第一の橋を渡り周囲がかなり広いので、ここらで車を停め、出来ればこの辺で見当たりたいことを願いつつ橋の上、下流を探した。おかげでボリュームはやや小さいけど、まあまあの第一候補の石を探し当てた。翌日はまたウトロの方の川へ入ったが適材が無く、その帰途相談して昨日の第一候補の石の場所より上流目指しヌカマップ川の奥へ入って行った。昨日の第一橋を通り、上流へ向かう程に、川とは段々遠くなり、川音は遥か下の森の中より聞こえてくるようになった。「まあ何とか成るさ」の調子で行くうちに森が切れて、やや遠い左下の川原右岸に大きな長い岩のような代物が目に飛び込んできた。「おい、ちょっと車を停めて」とだけで以心伝心、3人の目はそのものに注ぎ、「岩かい、大石だろか、大石でも大き過ぎるか、よし行こう。野口さん川の方見んなよ。運転頼むぞ」と嬉しい冗談とばしながら行くうちに道は段々下りていって、その大石のあるすぐ上流に第二の橋が有り、その向こうはかなり広い木材の土場跡だった。場所としては天与の地、「こりゃよいぞ」と言いながら降りて簡単に石に近づくことが出来た。所々若柳に覆われているが、全体は充分見れる。上面は真平の長い石だ。野口さんはさすが専門家、この石が川原の上に突き出ている岩の一部か、あるいは大きくとも一個の石か、スコップで石の底の砂利との離れ具合を確かめられて突然「万歳」とスコップを片手に持ったまま両手を高く上げて大声で叫ばれた。概略の測定では長さ3.5m、表面が真平の面巾が一番広く、狭い方が80cm、巾の広い方が1.3mの正三角柱（写真3）、全く人の加工で造ったような逸品。我々の熱意に対し、仏様のお授かりものと喜びで、早速帰途についた。野口さんも車中で「私の腕にかけて、日本一の慰霊碑を建てさせて貰います」と決意の程を言われ、まず大仕事の一つが片付いた。途中峰浜の郵便局へ飛び込み、役場へ電話した。「町長はおるかな、すぐ頼む」リリリ…「町長。俺だ、よい石を見付けたよ、仏様の授かりものだ、それあなたも知っているだろう、ヌカマップ川の昔温泉を掘った所があるだろ、あの橋のもう一ツ上の橋の所だ。明日すぐ野口さんに運んでもらうがいるかい。」「うん、いる。よかったな、ご苦労さん。」

翌日は野口さんが美幌から20tの重機とダンプを用意して搬出して下さった。この報は街中に急速に拡がって午後2時頃役場前に停めて披露したが、皆さんに充分満足して頂け、半月程山や川原を走り廻った3人も面目を施すことが出来た。

写真3　拝み石の搬出

なお拝み石の題字は藤谷町長が上京の際尋ねて、津軽藩第14代当主、津軽義孝

氏の揮毫を頂いたものである。この方も要職の多い方で、平成５年秋、札幌市で開催された日本博物館協会の全国大会に、会長として出席され、立食パーティーの時金さんと二人でお逢いし、約20年前の除幕式のことなど懐かしい想い出話をして下さった。がこの時已に壇上の歩行に介助者が要る老体とお見受けしたが、翌年か、お亡くなりに成られた。

三. 高倉先生との出会いと御指導の要請

①高倉先生との出会い

昭和40年代に入って北海道開拓記念館では、北海道史研究の大家である当時北海道学園大学学長高倉新一郎先生を講師にして、春は札幌の記念館、秋は地方の主要地で年２回、古文書の解読、解説の講習会を開催されていた。私も金さんも一緒に度々受講したが、昭和47年春、札幌での講習会終了後、特に先生に面会を求め、斜里町が津軽藩士殉難者の慰霊碑建立の企画中で、そのための資料調査や拝み石の探索など申し上げ、今後の御指導をお願いした。現在頼りになるのは町史上巻に掲載されている［津軽藩士の斜里警備］の稿だけで、それも著者も出所も由来も皆目不明の旨申し上げたら、先生がニコニコ笑みを浮かべながら、「あれはこういう訳だよ」と次のように述べられた。「私が昭和29年秋、いままで上京するたびに楽しみにして訪れた神田赤門前の古本屋で発見した［松前詰合日記］（シャリでの悲惨死亡事件）を、当時斜里町史の明治前史の編集担当の友人、更科源蔵君に貸して、それを彼が転載したもの」との事で、私は改めて先生との巡り合いを謝し、今後の御指導を重ねてお願いをした。先生は地方の郷土史家の熱意によって、埋もれていた史実が顕彰されてゆくことを、大変喜ばれ、出来る限りの指導と協力を固く約束され、励まして下さった。私が平成２年４月この松前詰合日記を楷書で書き上げるのに使った稿本は、先生がわざわざ私のために書いて下さったものである。なお先生の発見された［松前詰合日記］の原本は、現在北大図書館に秘蔵され貸出は行われていない。現在は北方資料室にマイクロフィルムとして納められている。

②慰霊碑構図の誕生

その年の秋の古文書の講習会が羅臼町で開催された。町の郷研から高桑、金、私の３人が出席、前夜は町の旅館で泊まった。夕食も終わり３人は布団の上に横になりながら、碑のデザインなどを主題に雑談に刻を過ごした。がそのうち高桑君が思案ありげに机の引出しから硯と紙をとり出し、やがて氏一流の鮮やかな筆捌きで、見事な一枚の絵を仕上げ、「おい、これでどうだい」と見せられた。この年の８月にヌカマップ川上流の国有林内川原から採取した長さ3.5m巾は一方が大分広い拝み石を逆に建て、回りにゆかり諸材を配置、台座の上面は波形を表し素晴らしい略図であって、さすがアイデアマンの異名の腕前に敬服したが、この原図が今日自然石の碑としては北海道一の威容を誇る立派な慰霊碑である（写真４）。私は正直なところ、巾広を上にした逆形の慣行を破ったアイデアに、多少抵抗はあったが、その後、ある時テレビで三浦半島先の城ヶ島に在る北原白秋の歌碑が、やはり巾広の方が上に建てられているのを見て、改めて氏の独創的な頭脳に敬意を表したものだった。次の羅臼町での講習滞在中にも高倉先生にお逢いし御指導を頂き、帰札は予定を変更して、羅臼―宇登呂廻りの遊覧船にして下さった。幸、晴天で穏なこともあったが、先生は船上から知床の山々をさかんにスケッチを続けられていたが、その昔松浦武四郎ならずとも、史家は総じてその道にも長けておられるものと感銘一入だった。役場で藤谷町長とも面談され、殉難事件の史実の調査に巾広い道を教えて下さった。翌年７月16日、164年前殉難者を葬ったと思われる場所近くのゆかりの丘に、故郷岩木山そっくりの斜里岳に向か

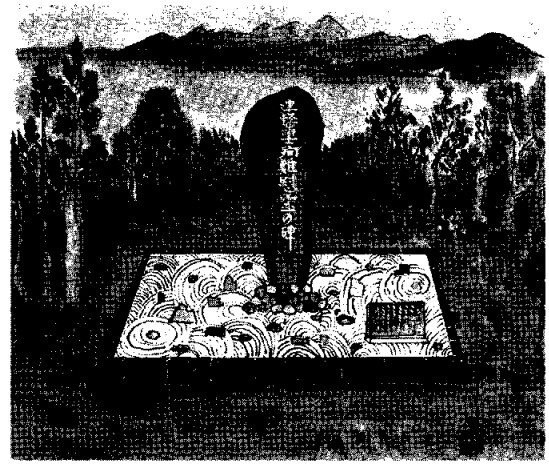


写真４　高桑氏のアイデアによる原図を絵にしたもの

い建てられた素晴らしい立派な慰霊碑の除幕式が行われた。殉難藩士の子孫６人を始め、津軽藩第14代当主津軽義孝氏、青森県、弘前市、北海道、地元などの関係者多数の出席であった。

高倉先生も除幕式には是非出席して下さる旨約束を頂いていたが、当時は先生の大学でも学園紛争の最中でついに実現出来ず、両者共々残念な事であった。そのような御縁から私は先生がお亡くなりになられるまで御交際を頂いた。

四. 日記の筆者斉藤勝利の子孫探し

別稿にも書いたが、陸奥史談会長の成田末五郎氏は、弘前側で子孫探しを始め、精力的に資料調査に取り組んで下さった。しかしそのうちの重要な一つである日記の筆者斉藤勝利の直系子孫探しで壁に打ち当り、史談会の手では術がなくなって失った。弘前には傍系の五代目（成田たけさん）一人在住。勝利の墓は、上記の人の案内で新寺町の日蓮宗法立寺境内に建立されて在り、苔むす状態を綺麗に洗って戒名も［忠孝院勝利日體居士］（写真５）とはっきり判るようになった。勝利の四代目只一郎は幼くして両親に死別れ、祖母の手によって優しく育てられ、若い頃（18才）単身遠縁を頼って上京したようだ。とそこ迄は判ったが、以後のことに付いては全く音信もなく不明で、史談会もそこまでと諦めたようだ。そのことを東奥日報社の楠美鐵二氏（写真６）が聞かれ、「それは残念なこと、私の新聞社で成功するかどうか判らないが、お手伝い致しましょう」ということになった。以下は楠美氏から私が直接聞いたことを述べることにする。「八方手を尽くして当主は斉藤久といい、現在警視庁勤務で住所は八王子市片倉町とわかり、おそらく父只一郎が、若い頃独りの上京となれば、小さくしかも軽いもののみを信玄袋に入れて持って行っただろうの想定から、証としての最も確率の高い墓碑の戒名の写真を携行した。いよいよ探して漸く〈斉藤久〉の表札の家を訪れることが出来た。日中だったので奥さん一人だったが、簡単に来意を告げて招ぜられて客間で対面した。一通りの目的を話したが一向に反応がない。

写真５　斉藤勝利の墓

写真６　中：工藤文作の子孫工藤悦太郎氏
右：東奥日報社長楠美鐵二氏　左：筆者

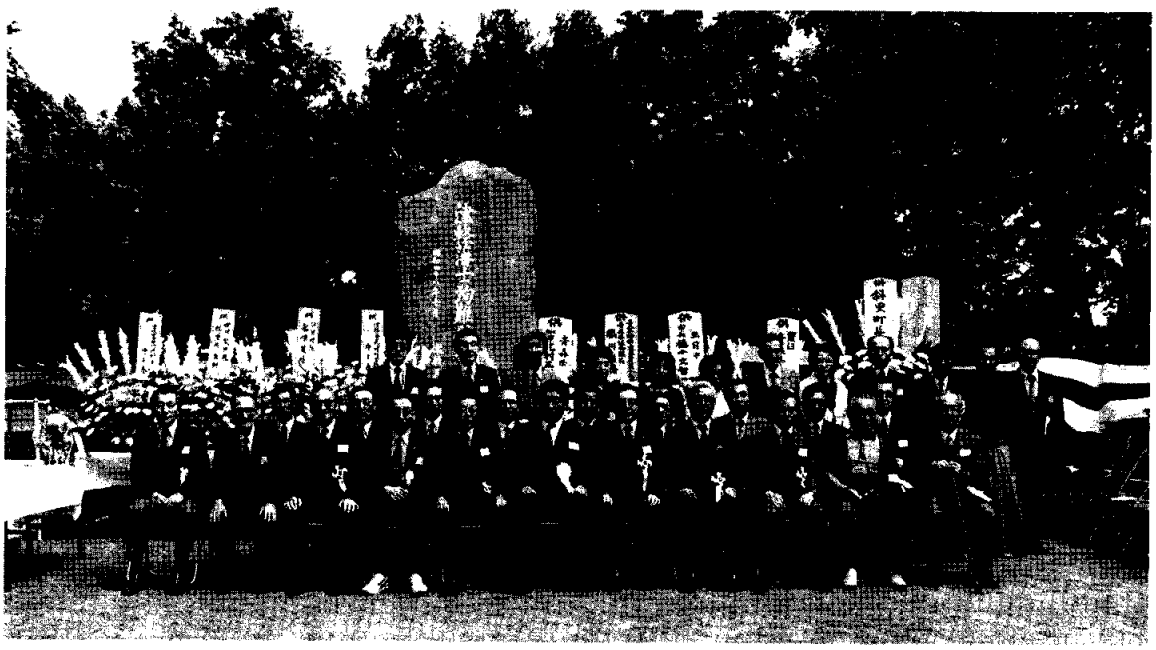
そこで『亡くなられたお父さんのお名前は』『只一郎と申します』と返ってきた。よし、一山越えた。次に『私共の調べではあなたの祖先斉藤勝利は、165年前エゾ地シャリに派遣され、漸く生きて帰り、［松前詰合日記］という貴重な記録を書き遺してくれた立派な武士とみております。何かそれを頷くような物は伝わっておりませんか』『そのお話を聞くのも初めてですし、父は生前、弘前出身とだけ言ったことがありますが、先祖が武士だとか、昔のことなど一切口にしたことがなく、したがってそれに係わりのあるようなものは何一つございませんし、弘前の方とは誰とも文通しておりません』とまだ不審顔のままだった。『そうですか、では誠に恐縮ですが、お仏壇に詣らせて頂けませんか』とお願いをした。許しを得て拝んだ途端、私がどうか有ってくれよと心に祈っていた戒名を納めてある繰り出し（戒名を書いた薄い小板・位牌を納めておく器物）が有った。うやうやしく手にして一番奥の古びた位牌を抜き出して読んだところ、紛れもなく勝利の墓石に刻んである戒名と同じ。私は感激する胸を静めながら、持ってきた勝利の墓石の戒名と同一であることを奥さんに示し、あなたが正真正銘、斉藤勝利の五代目の子孫であることを申し上げ、漸く納得して頂き、お互いの奇遇を語って辞去した」と氏のいつもの飾られざる話し方で大仕事を話して頂いた。そのおかげで斉藤久夫妻も自らの身分と責任を感じられ、昭和48年５月16日60余年振りに弘前に行き、

菩提寺、法立寺を訪れ墓参りしたその写真を載せた記事を東奥日報は伝えているし、昭和58年７月の慰霊祭には、弘前側から、初めて大勢の参拝者があった（写真７・８）。その中に、福士市長と夫妻一緒に参拝され、その挨拶中で、現在の東奥日報社長の楠美さんのおかげで斉藤勝利の子孫であることが始めて判り、それまでは存じませんでしたと仰言った。しかし世は変わり、斉藤久氏も定年退職後、現在は子供の勤務地の関係で熊本県西合志町に転住され、勝利の墓とは益々縁遠くなり、弘前市在住の只一人傍系五代目成田たけさん（73才）が守っているようだ。

ちなみに大変お世話になった成田末五郎、楠美鐵二の両氏共、故人となられ、初訪弘以来25年の歳月の経っていることを示している。

写真７　昭和58年慰霊祭に勝利の子孫久夫妻参拝

写真８　昭和58年慰霊祭弘前側参拝者



五. 弘前市と友好盟約締結の経緯

①守る会幹部の初訪弘

慰霊碑建立の翌年より、正式に守る会（当時は建立委員会の転身なので会員15名、写真９）の手によって毎年慰霊祭を行ってきたが、財源は町の助成15万のみで、それだけの金では何も出来ない。そこで相談して昭和52年に年額会費一人2,000円の会員制に強化して協力を願うことにした。おかげで会員も年々増加し、300人を維持するようになり、慰霊祭の参拝者も200人にも250人にもなり、町の文化的行事として脚光を浴びるようになった。会では当初より毎年慰霊祭参拝の案内状を遺族を始め、青森県知事、県議会議長、弘前の行政議会、経済諸団体、報道機関等に出し続けたが、当時東奥日報社弘前支社長の楠美鐵二氏（北方問題の研究家で著書・連載もの有り、翌年より斜里に来られる）の参拝が在るのみであった。昭和56年に至り、市長代理として吉村図書館長が初めて参拝され、その昔異郷の地で無念に果てた津軽藩士72名の御霊を現地斜里の町民が真心込めて盛大に慰霊祭を催された模様を詳細に報告された。一方守る会では建立十周年を控え、かねて懸案事業として

境内の整備施行、詰合日記解読書の1,000部記念誌の増発刊等約300万円ほどの金が要ることになり、小泉さんと相談して「俺とあなたとで工面せねばなるまい」とお互い腹決めした。小泉さんはその道の達人でぼつぼつ用意されたが、私は金の段取りなど一切不得手、肩にかかった重荷が気になる毎日が続いた。ところがある晩、床の中で妙案が浮かんだ。「そうだ、縁の薄い斜里の方々に毎年2,000円もの会費を頂いて運営しているのだから、弘前の方にも一回限りの賛助会員になって頂いても無理じゃなかろう。よし、これだ」と早速その頃東奥日報社長の要職に就いておられた楠美氏にお願いの手紙を出した。半月程経って、同氏からの電話で、県議会議長が県の北方領土返還促進協議会長を兼務しているので、その方に頼んで目下協力要請中とのこと、さらに昨日ある会合で、弘前市の山谷助役にお逢いしたので、斜里の日置会長さんからこれ々の依頼が来ている旨話したら、「私の方へも正式の要請があればお手伝いしますからと仰言ったから手紙出しなさいよ」との有難い添え言まであった。嬉しかった、そこで私は丹精こめた筆書きの手紙を弘前市長宛に出した。約1ヶ月程経ったある晩、山谷さんから電話があって、「金も大分出来たし、皆さん一度遊びにいらっしゃいよ」とのこと、また嬉しくて仲々眠れなかった。翌朝早速博物館へ飛んで行って、小泉、金、高桑の3名と大喜び弘前行きを決めた。誰かが、「ところで、これを契機に弘前と斜里との交際が始まるかも知れんから」と、町長にも話しかけることになって、相談したら是非連れて行ってくれと言うことになり、博物館の横山課長も随行して、忘れもせぬ、昭和57年4月19日、福士市長時代になって初めて一行6人胸を弾ませて弘前行きをした。まず県議会事務局で楠美さん立会いで、100口分20万円を頂戴、やがて弘前市迎えの車で市役所入り、福士市長表敬訪問、そこで市長から251口分502,000円を頂いた（写真10）。主に建設・経済団体からの御協力であった。感激の至り、市長は前年代理として参拝された吉村館長の報告を鮮明に記憶されていて、私共のいささかの奉仕に心情こめて感謝の言葉を繰り返し繰り返し述べられ、かえって恐縮するくらいで、自ずと周囲が明るく大きく感じられる心境になっていった。晩は古風に凝った翠明荘で歓迎夕食会を開いて下さり、

写真9　昭和50年第3回慰霊祭当時の僅な参拝者

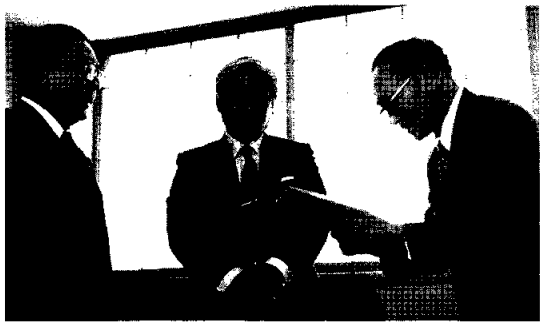


写真10　昭和57年4月19日弘前市応接室にて

百年来の知己のような心易さで話が弾んだ。

②私の悲願　弘前市との縁結び

私は守る会員の増加によって、年々の慰霊祭が盛大かつ厳に行われ、町の異色の文化的大行事として定着するに従って、一つにはこの慰霊祭を次の世代の人たちに語り受継いでもらいたい。二つには殉難藩士の出身地である弘前市から毎年一人でも正式に代表としての参拝者があれば、泉下の御霊もさぞかし喜ばれるであろうと考えるようになった。そこでそれを達成するには、この供養を縁にして弘前市と斜里町とが他人でないと言う何かの結びをしてもらうことだと強く考え、常に胸中深く秘めていた。そのような考えを持ちつつ、翠明荘での歓談の中、福士市長さんが義理人情に篤く、祟祖の念深く人間性誠に豊かな方だということが惚れ々する程私の頭に焦げ着いた。そういうことから常々胸中秘めていた願いを、この方なら必ず聞いて下さるに違いないと、自分に言い聞かせた。「今年の慰霊祭には是非お詣り下さいよ」、「ハイ必ず詣らせて頂きます」との約束が出来た。今日弘前市と斜里町との交流が、友好の域を乗り越え本家、分家に等しい親しい交際が続

けられているが、その尊い種はその席で播かれたのであった。その晩私は感激で仲々眠着かれない床の中で、また一つ無鉄砲にも等しい考えが浮かんできた。「そうだ、市長さんが慰霊祭にお詣りの歓迎夕食会の席の挨拶の中で、兼ねての悲願をお願いしよう。よーし直訴だ、福士市長さんならしかと聞き届けて下さる方だ、が確かに御無礼だ、初めてのお客さんに対し何とした非礼だ、しかも内容の予告もなしに」と自問自答を繰り返したが矢張り直訴でもやるより仕方ないと決意し一切誰にも相談しなかった。話したら潰されるに決まっている。さてその春、弘前で福士市長さんの御参拝の約束の年も初夏を迎え、慰霊祭も近づいて来た。おかげで公園内の碑周辺の環境も著しく整備され、碑の建つ丘に至る参道の入口から眺めると、自然石の拝み石としては、全道一の威容を誇るに相応しい姿が浮かんで見える。青森県脇川県議会議長を始め、弘前市から福士市長、石田厚生常任委員長以下６人、経済界各団長など総勢20余名を迎える準備が完了した。しかしその前日、親友の小泉さんだけには、「俺は明晩こうゆう事をやるが止めるなよ」と前置きして直訴の件を話した。彼は笑いながら、「お前そんな大それたこと。角力に例えれば横綱と前頭のようなもの、褌を簡単に摑まれて土俵の外へポンと投げ出されるのが関の山だよ」とからかわれたが、「私は投げ出されたら出されたでまた考えるから誰にも言わんでくれ」と頼んだ。幸いにも明けてその日はよいお天気、町長車で女満別空港まで福士市長迎えの車の中で、私は今晩の直訴のことを町長にも一度打ち明けておかないと、会食中にでももし福士さんが「町長さん、いま日置会長さんから言われた事についてあなたはどうお考えですか」とでもあって、「私も今初聞きですが」との返答となったら、こりゃ不拙いと考え、船津町長にも直訴の決意を簡単に説明した。が仲々返事が返ってこない。無理もないこと全く予想せぬ大冒険ややおいて、「まあ池に石ころを投げてどんな波紋が来るかを見ることだね」とだけ言われた。

③直訴成功する

歓迎の式場でまず予想もせぬことを弘前側から申込みされた。開式前に弘前市と議会から守る会に、協力金の贈呈式を行いたい旨だった。弘前市から30万円、市議会より10万円頂いた（写真11）。それは４月訪弘の目的が、建立十周年記念事業協力金受領のためだったので、そのことを確り踏まえられての市と議会からの、温かい措置であって、この義理人情の厚い行為をされた弘前人に対し、次にお願いをする私の胸を弾ませる大きな励ましだった。私はまず弘前市がりんごと美人と相撲の全国一を讃え、一通りの言葉の後、兼ねて胸中温かく秘めていた弘前市との契りを真情込めてお願いをした。そして最後に「弘前市並びに斜里町のお殿様と御家老様方お揃いの席に、殉難藩士の墓守りの代表日置順正この儀謹んでお願い申上げます。なにとぞお聞き届け下さいますよう、伏して

写真11　昭和57年7月15日弘前市及び議会よりの協力金贈呈式

願い上げ奉ります」と芝居の口上様で申述べた。多分普通の歓迎会としては、異様の雰囲気であったと思う。その時私は格の違いは充分認識していたので、今日の友好都市の実現などいささかも夢みることなく、文化的な兄弟の契りをと言う表現を使った。船津町長、藤谷前町長と次々と歓迎の言葉があって最後に立たれた福士市長が、懇な謝意を述べられた。「只今日日置会長さんから、御要望の件については、残念ながら弘前市は前々の市長時代から、他からの要望を頑なに断り続けて現在どことも結んでおりません。しかし春以来待ち続けた斜里に来て明日の慰霊祭を待たず先程立派な慰霊碑も参拝し、思いを新しくして参りました。斜里の方々が異境の地で果てた私共の祖先を、代わって誠心込めて毎年盛大な慰霊祭をして下さるその温かい真心に、私は胸を打たれました。幸、この席には大勢の議員の方や各界の代表者もいらっしゃいます。御要望の趣きは充分承りましたので、帰ったら前向きに検討させて頂きます」と自信溢れる力強いお言葉を頂きました。本当に嬉し

かった。［至誠天に通ずる］全く文字通りの感激だった。顧みれば４月訪郷した私共数人以外、全員初対面の席で、全く予想もせぬ難しい要望を、長い慣習を破棄して、即断で友好を容れて下さった識見と大度量、市長が席に戻られてから私はお礼で下げた頭が、暫く涙で上げることが出来なかった。町民の真心が、誠意が、義理人情の篤い弘前の人方の尊い目に正しく映ったのである。

その後御一行が帰弘されその年私は御礼を兼ね弘前ねぶた観覧方々表敬訪問をして更なる友好促進をお願いをした。また弘前市の９月の定例会には、夏の来斜の際の議員団長石田信夫厚生常任委員長が［斜里町との友好盟約推進］の一般質問に対し、市長は斜里町との友好都市盟約の方針を明にされ、全市民に渉ってその必要性を説かれその理解を深めることを努められた。一方斜里町の方でも弘前が斜里を知らぬと同様に、行政も、議会も一般も、弘前市は全く未知の都市であって、町では取り敢ず高橋助役と長谷川経済部長を弘前に派遣して、市の状況の把握に努めた。弘前市でも佐藤商工部長が来斜され、その後の盟約締結事務の打合せなど、その作業は一切弘前側にお任せし、幸にしてその後、順調に進み、昭和58年２月12日、弘前市文化センターに於いて盟約の調印式を行うことになった。当町からの出席者は船津町長、田中教育長、和田庶務課長、宮内議長、木村健二副議長、日置守る会長、小泉副会長、金理事の８名であった。

④調印式終了後の感動的な福士市長の挨拶

「このたび斜里町の皆さんが長年に亘り私共の祖先である津軽藩士殉難者の御霊を真心込めて供養して下さった御縁で、弘前市民の深い理解を得てここに友好都市の盟約を結ぶことが出来ました。誠にお目出度いことでございます。斜里町と弘前市はこれから長い長いお交際をしてゆくことになりますが、大切なことは数や、形ではございません。真心です。この真心とは互いに信頼し合うことです。どうぞ斜里の方も、弘前の市民皆さんも、この尊い信条をもって末長く友好の絆を大切にしていくよう切にお願い申し上げます」と力強く述べられた。私は聞きながら胸が詰まってきた。数や、形ではないぞ。それは斜里に向かって言われた有難い言葉なんだ。真心さえあれば何の心配もなく、同等に交際出来るから安心しなさいよとの何と巾の広い思いやりの言葉だろう。

真心。そう言う崇高なお人柄なればこそ、頼まれもしないのに慰霊を守り続けてきたこの斜里町民の小さな真心を、大きく大きく認めて下さって格の違いなど目を瞑って友好盟約を結んで下さったのである。

私は福士市長さんのお言葉を聞きつつ、これから弘前市と斜里町が交際するのには一にも二にも真心を忘れてはならぬことを心中固く決意した。当時弘前市は東北の城下町として、300年の古い歴史と香り高い文化に恵まれた人口18万の中都市、一方斜里町は当時開基百年に満たない歴史の浅い、人口16,000の小さな町であった。

六. 改めて弘前の方を憶う

昭和48年慰霊碑建立以前から、私は弘前の方とその史実の調査、研究のため、深い交際を続けてきたが、とにかく誠実で義理人情に篤いのには常に敬服していた。65年前の昔の平和時代、旭川の軍隊で信義を重んずべしと人の道を徹底的に教育され、その道を守り続けている心算の私でもたびたび脱帽することがあった。友好盟約に至るまでも、数えてみれば、多額の協力金の頂戴、直訴の御聞届、格の違いに目を瞑り、盟約を結んで下さった温情、式典の際の福士市長が斜里に配慮されての有難い御挨拶などなど弘前人なればこその賜と、有難さで胸一杯である。私の故郷は岐阜県長良川上流の［郡上踊］で有名な八幡町の隣町で、私の住んだ部落の向い山に在った篠脇城主・東常縁：とうのつねより（1471年）は［古今和歌集］研究の当代随一の歌学者で、全国の多くの歌人が教えをこいに集まったと史実が伝え、今日町では［古今伝授の里］、いわゆる文化の郷をキャッチフレーズに町興しに励んでいるが、弘前人と同じく素朴で人情深い。弘前は春の桜祭（写真12）、夏のねぷた祭（写真13）、秋の紅葉（写真14）と菊祭（写真15）、冬の雪祭など穏やかな心境でその情景の中に溶け籠める祭、即ち情操を養う祭日を集計してみると、十日に一日位の割合になるようだ。よい環境に培れの言葉は、まさにそこから生まれると思う。

国の［重文］を始め、100を越える指定文化財に埋もれ、十日に一度心を和む祭に恵まれている弘前人は、俗化しないぞと自らを励ます誇りを持

写真12　弘前の桜

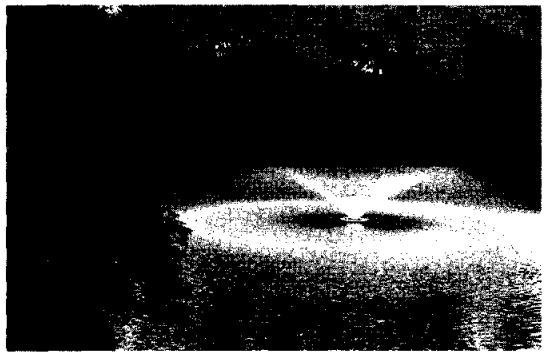


写真14　奇麗な紅葉

写真13　弘前ねぷた祭

写真15　菊祭 望郷の念斜里岳を遥拝

っておられるように映る。さてここでさらに一度、盟約を結ぶに至った恩人を振り返って見る。

①よくよくこの斜里での殉難事件を、今日の我々が知ることが出来たのは、その越冬中の悲惨な内容を露見したら、お家断絶、切腹覚悟で密に書き遺してくれた、斉藤勝利の書いた［松前詰合日記］である。したがって斉藤勝利の勇気と正義がなかったらこの書は現われなかった。

②は表紙に［永く子孫迂と傳］を守り続け、多分四代只一郎が若くして上京の際、信玄袋の中に入れられたのではなかろうか。その後日本は国を失う程の大戦争を起こし、本国を焼土と化し、東京周辺で生きられ、また焼かれなかったのが不思議とさえ思える程だった。勝利の書き遺してくれた［松前詰合日記］がどのような足取りを辿ってか昭和29年秋、東京神田の古本屋で、当時北大教授で北海道史研究の大家、高倉新一郎先生によって発見せられたのである。もしこのお二人のおかげが無くば、この悲惨事件の内容は永久に世に出ず失いになったことだろう。

③殉難事件の調査に献身的に取り組んできた郷土史家達の言を容れ、自らもその先頭に立って、慰霊碑の建立を達成した、時の斜里町長、藤谷豊氏の功績である（写真16）。

④慰霊碑を守る会の手によって、毎年７月16日慰霊祭が行われ、その仏縁で弘前市と斜里町とが［友好都市］の盟約に踏み切って下さった、当時弘前市長、福士文知氏の英断である（写真17・18）。

もし、このうちのいずれかが欠けても、今日の両市町の関係はない。私は幸、よい友達に恵まれ、おかげで27年間この殉難藩士の慰霊一途に生きて

写真16　藤谷豊氏の参拝

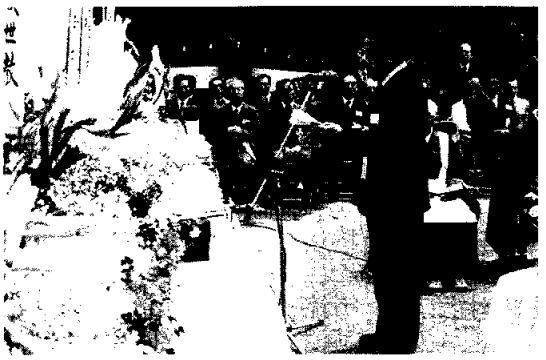


写真17　昭和58年慰霊祭 福士市長慰霊の辞

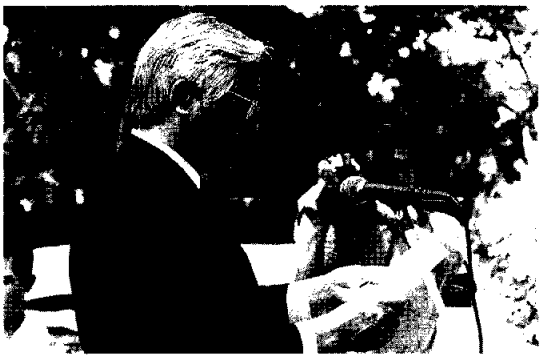


写真18　昭和58年船津町長慰霊の辞

きた。盟約締結後も、真心こめて慰霊祭を続けることが友好の第一の基本と固く信じ、すこしの余念をも挿し挟まない。さらに友好盟約の記念として暖簾分けして頂いた、国の重要無形民俗文化財の弘前ねぷたも、関係者の献身的な努力と、町民の理解協力によって、年々盛大になり、誠に悦びに堪えない。したがってこの弘前ねぷた祭も弘前の分身と心得、正しく発展振興させ次の世代に送ることが友好の第二の基本と確信する。

次にこのようにして、弘前と斜里との友好関係を固めて下さった福士市長の後を受け継がれた現金沢市長も識見博く誠実そのもの、情に脆く私は次のような憶い出がある。

平成元年弘前市制施行百周年の弘前ねぷた祭には、本町から230人の町民号で奉祝参加した。最後の晩のお別れ大パーティーには、市長代理として当時の金沢公室長が出席されたが、友好の尊さに感激せられて、最後までハンカチを放されなかった。向いの席の偉大な人間像に、私の目も自然に潤み、私は堪えられなくなって、隣席の職員に、「立派な上司をもって倖せですね」と声をかけたら、「おかげさまで、有難うございます、いずれトップになって欲しい方です」と言われた。また、盟約十周年記念の斜里のねぷた祭に、参加して下さった、８ｍの日本一の大ねぷたを、町の宝にと突然御寄贈の要請を快諾して下さった御決断、さらには平成４年９月12日の町始まって以来の大水害に、弘前市から多額の御見舞金を頂戴したが、行政から新宅助役、市民を代表して斉藤商工会議所会頭の両氏が、わざわざ来町されて、懇な御言葉と共に頂いたことがある。今日のことゆえ送金だけなら簡単だ。なのに、［行って御見舞の心を届ける］これが弘前人の床しさだと思う。私はおかげで長い間弘前の方々と交際をしてきた。たびたび書いたが、福士市長が盟約の挨拶の中で「真心が友好の基本」と言われたその言葉の重味、歴史の浅い土地に育った我々は、行政を始め、御本家弘前市に対しては、まず動き出す前に「これでよいのか」と一歩踏み止まって考えてみることが大切だと思う。顧みれば27年余、津軽藩士の慰霊に繋がる仕事に携わり、常に生甲斐を感じ、盟約締結後は人情豊かな弘前の方々と温かい交際をして頂き、微塵も悔ない人生であったことに深く感謝して筆を措く。